

位置と環境

鳥居ヶ段遺跡は、輝北町の東部、平房川の支流である大鳥川の左岸に立地し、県道仏迫・牛根線より一段高い、標高196mから205mの南東に開けた狭い台地上にある。

調査の経緯

国営輝北ダムの建設に伴い、九州農政局曾於農業水利事務所が輝北町教育委員会に委託し、県教育委員会の協力を得て、平成7年(1995)に前床遺跡と同時期に確認調査及び本調査を実施した。調査面積は2,010㎡であった。

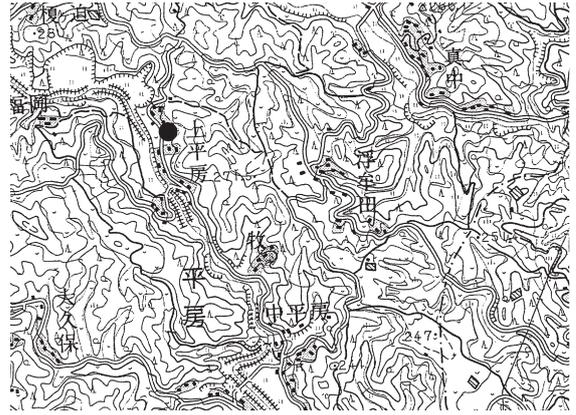
遺構と遺物

平安時代(9世紀後半～10世紀前半)の竪穴状遺構1基、土坑2基、溝3条、古道3条、焼土11か所、ピット19基が検出された。

竪穴状遺構は、一部削平を受けており、その全容は不明だが140×150+αcmのほぼ方形で、長軸は南東から北西の方向である。検出面から床面までの深さは約30cmでアカホヤ火山灰層まで掘り込まれている。遺構のほぼ中央部には、径20cm程度の大きさで、深さ50cmの柱穴を持つ。また、南東側の壁際から50×40cmの大きさの炉を検出した。深さは10～15cm程度で、埋土及び炉の周辺から炭化物が確認された。柱穴を中央部に1基しか伴わないことから簡易的な建物であると思われ、炭化物の出土量及び煮沸具である甕が周辺から多量に出土していることから、ここで煮炊きをしていたと思われる。遺構内からの遺物は、全て土師器で埴1点以外はすべて甕であった。

土坑は2基を検出し、いずれも長軸は約120cmの楕円形を呈するものである。古道は、削平を受け、確認できた2条の古道以外は部分的な検出であった。ピット19基の内、5基はほぼ直線的に並ぶが、その他については規則性は見いだせない。

遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、青磁、焼塩壺、紡錘車、石器等が出土している。縄文時代の遺物には、押型文土器2点、曾畑式と思われる小片2点、内面に条痕を残す土器小片3点が出土した。



第1図 鳥居ヶ段遺跡の位置

土師器の器種には、埴・坏・皿・甕がある。

埴は高台をもつものと、円盤状の底部をもつものがある。高台をもつ埴は、口径13～15cm、高台径7～8cmのものが多い。円盤状の底部をもつ埴には、口径13cm前後、底径5～7cmのものがほとんどである。いずれも体部が直線的に延びるものが多い。

坏は、平底で体部が直線的に立ち上がる器形である。円盤状の底部をもつものもあるが、全てヘラ切りで糸切りはない。口径は12cm前後が多く、底径は5～6cm前後と7～8cm前後に二分される。器高は5cm前後である。

皿は、直線的な体部で口縁部でやや外反する。

甕は、完形品が少なく全体の形態はつかみにくい。口縁部の形態は様々であるが、胴部については膨らみを持つものが多い。

黒色土器は内黒のみで、埴が多く坏は少なく、体部の内湾がやや強くなる傾向にある。赤色顔料を付着させるものについても埴が多く、体部が直線的なものが多い。

墨書土器は、28点確認した。文字で判別できるものが2点あり、「三代」「万」が判読できる。28点中20点が黒色土器もしくは赤色顔料の付着した土器であった。

須恵器の器種には、埴・坏・壺・甕・高坏があるが、出土量は土師器と比較すると極めて少ない。

青磁は数点出土したがいずれも小片である。表層からではあるが、越州窯系青磁と思われる低い輪高台をもつ碗である。

そのほかに、焼塩壺28点、紡錘車9点、石鏃1点、

磨製石斧1点、磨石、砥石、石皿が出土している。

特徴

竪穴状遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果では7世紀中頃の数値を示したが、遺構内出土の土師器は9世紀後半と思われ、両者にはかなりの隔りがある。

また、埴の底部外面に指頭によると思われる放射状の調整痕が残るものが2点出土している。県内での報告例は本遺跡以前にはないが、宮崎県の3遺跡で報告されている。日向との関連性も考えられる。

本遺跡の性格としては、遺構や土器の集中、黒色

土器や赤色顔料が付着している土器、墨書土器の出土量の多さから祭司的な遺跡であることが考えられる。

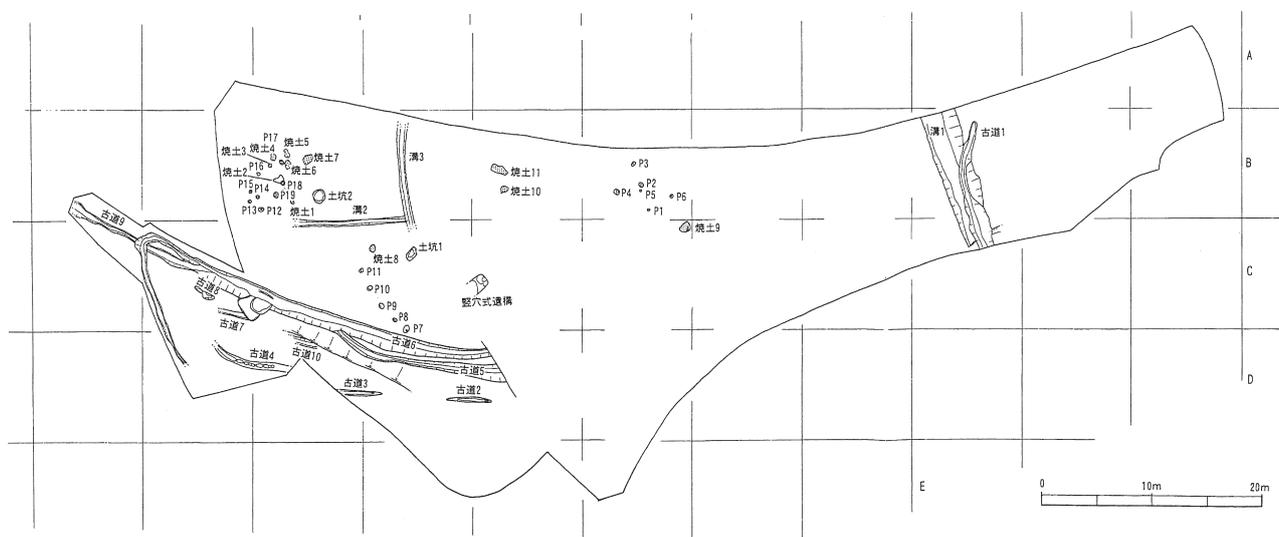
資料の所在

出土遺物は、輝北町教育委員会に保管され、一部は輝北町歴史民俗資料館に展示されている。

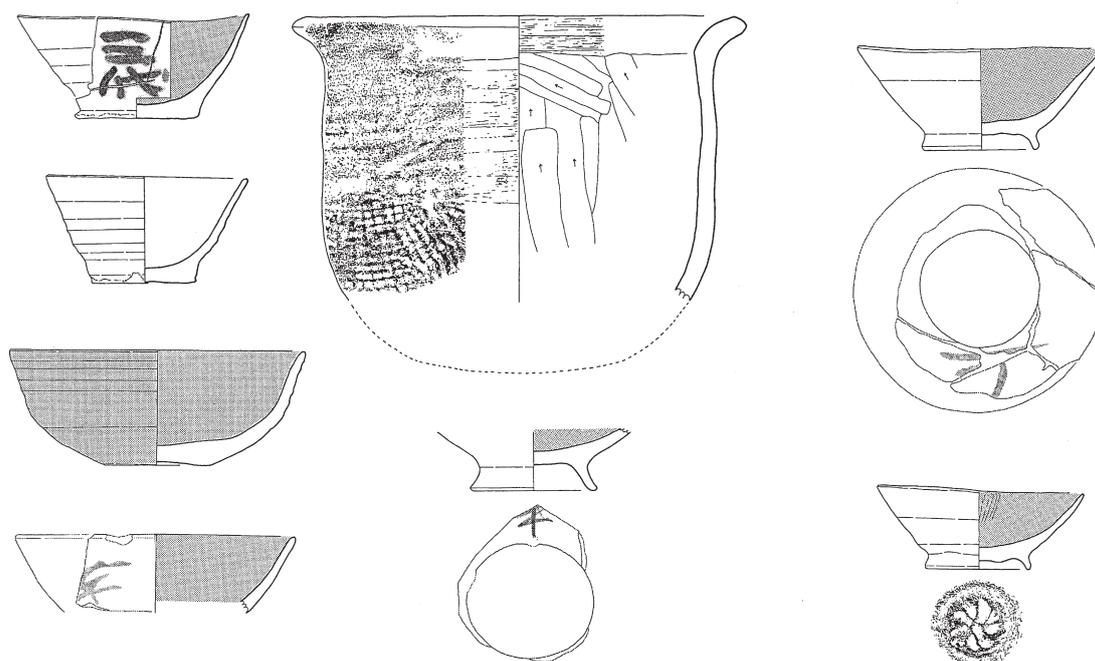
参考文献

輝北町教育委員会1998「前床・鳥居ヶ段遺跡」『輝北町埋蔵文化財発掘調査報告書』1

(倉元良文)



第2図 遺構配置図



第3図 遺構内出土土器及び墨書土器等